

---

# 要冷凍

ミラーージュ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

要冷凍

### 【Nコード】

N6118D

### 【作者名】

ミラージュ

### 【あらすじ】

初めてホラー書いてみました。軽い気持ちで書いたのであまり厳しいご指摘は勘弁して下さい。

夏のクソ暑くて生暖かい風が吹く気持ち悪い夕方、携帯で呼び出された俺は大小様々なトラックが行き交う運送会社の集配場にやってきた。この会社の社長を務める父親の仕事を手伝う為だ。

「悪いな、突然呼び出して、お前しか頼れる人間がいなかったんだよ」

「……勘弁してくれよ、忙しいのはわかるけど、俺まだ学生なんだぜ？ 社員じゃねえんだからよ」

この時期になるといつもこうだ。巷は御中元シーズンで倉庫は届け物でごった返し、とても社員ドライバーだけでは捌ききれない。短期のアルバイトを雇っているとはいえほとんどが素人で全く人手にならない。

そこで困った親父は毎年最後の切り札とばかりにたった一回だけ興味本位で仕事を手伝った俺に泣きついてくる。おかげで俺は下手なドライバーよりも道に詳しくなり、もはや中堅ドライバーだ。

「今年は充分にアルバイトがいるんだが、ちょっと厄介な荷物があってな、素人には任せられないんだ、かといってベテランはみんな配達に出ちまってるしな」

「厄介な荷物？ 何だよそれ」

親父に案内されて倉庫の奥に行くと、今回の御中元シーズンから新しく始めた『冷凍便』の保管室になる巨大な冷凍室が見えてきた。コツコツと上げてきた利益で買い揃えた最新設備らしい。

「うひゃあ、この中すげえ涼しいなあ、配達なんて行かずにここにずっといたいなあ」

「俺が一生懸命働いてこしらえたこの会社一番の自慢の品だ、これで大手配達業の会社とも渡り合っていける」

「息子に大して小遣い渡さずに自分はこんなデッカい玩具購入かよ、たまったもんじゃねえな」

そのまま冷凍室の奥に行くと、大きな台車の上に発泡スチロールの箱が六つ置いてあった。大小の正方形の箱が二つ、長方形の長い箱が四つ。

「この荷物が例の厄介なヤツかよ、見た感じそんなヤバそうな代物には見えないぜ？」

「配達指定日と時間指定がものすごく厳しい条件でな、他の配達ついでじゃとても寄れないんだよ」

また面倒臭い仕事を俺に押し付けやがって、いい加減にしてくれよ。まあどうせ今は夏休みだし、俺も暇って言えば暇なんだけだな。

「で、どんな時間条件なんだよ？ 今からって事は遅い時間か？」

とりあえず俺は冷凍室から台車を押して外に出して親父に詳細を聞いた。どうせ帰りの遅い客の無理な注文を受けたんだろう、そんな予想をして楽勝気取ってたら親父の口から出てきた言葉は遙かに想像を超えていた。

「明日の朝六時だ、時間厳守だぞ」

「は？ 朝六時って何だよ！ だったら今からじゃなくても……」

「これが届け先の周辺地図だ、慣れない場所だと思うが国道沿いだから迷わずに済むと思う」

「は？ これ、他県じゃねえかよ！ 完全にこの会社の配達地域超えてんじゃないか！」

しかもこれ、結構遠いぞ。下なんて走っていたらとても明日の朝なんて間に合わねえ、高速乗るしかねえじゃん！

「すまない、頼む！ 新サービス普及の為には断る事が出来なかったんだよ！ 荷物六つとも同じ家への配達だし、もちろん高速代も

特別なアルバイト料も払うから、親孝行だと思って助けてくれ！」

親父にペコペコと頭を下げられ、断れなくなってしまった俺はしぶしぶ軽の冷凍車に荷物を全部積み込み、使い慣れない全国版地図を開いて倉庫を後にした。

「……こりゃ結構長丁場になるな、高速乗る前に腹ごしらえしておくか」

腹が減っては戦も出来ぬ、俺は高速入り口前の牛丼屋に車を止めて、特盛と卵と味噌汁をかつくらった。

「……あ、やべえ」

全部平らげてから思い出した。そういえば自分の車に乗っていた癖で冷凍車のエンジン切っちゃった。軽自動車のしょぼいタイプのヤツだから、エンジン切ったら荷台のエアコンも切れちゃうんだったっけ。

「……しまったなあ、冬ならまだしも、こんな蒸し暑い熱帯夜じゃもう荷台もムシムシしちまつてるかもしれないなあ……」

かといって中身が溶けていないか確認するのも怖いし、配達に行か

ない訳にもいかない。とりあえず今からエンジンかけてエアコンを最大にまで冷やせば何とかなるかもしれん。ポジティブに考えた俺は気を取り直して牛井屋を出て高速に乗った。

「……しかし暑いなあ、運転席もエアコン最大にするか、どうせ俺の車じゃないし」

それでガソリンが無くなっても途中でスタンド行って会社名義で領収書切ってもらえば問題ない。全ての諸事費は払うって親父も言うてたしな。

暇で眠気がしてくる頭をFMラジオの音楽でごまかしながら、夜中で交通量の少ない高速を非力なエンジン全開で走っているとトンネルに入った訳でもないのに突然ラジオの電波の入りが悪くなった。

「地域が変わったから電波が届かないのか？ 他の局はどうだ？」

しかし、どの局も全く電波が入らない。それどころか全国放送のAMラジオですら砂嵐状態だ。

「チクシヨウ、これだからボロ車はよ！」

頭にきた俺はラジオを切って運転を続けた。すると、今まで音楽で聞こえなかった奇妙な音が後ろから聴こえてきた。

……ギシギシ、ギシギシ……

何だこの音？ 何か発泡スチロール同士が擦れ合う様な摩擦音。荷物はそれぞれ重ねずに平らに置いたから接触する事はないはずなんだが。

……ドン……

「……え？」

今度は座席の真後ろの荷台の壁に何か当たる様な衝撃音。何だ何だ？ まさか冷凍の荷物が溶けて何かが飛び出してしまったのか？ 壁に備え付けられた覗き見用のガラスの先をバックミラーで確認したけれど、荷台で何かが転がっている気配はない。

「……気のせいかな……」

気を取り直して大きくあくびをして、肩のコリをほぐす様に首を回したその時だった。

バチンッ！！



「うわぁー!!」

バックミラーに映るガラスの中から、白い人の手のひらがこちらに向かって壁を叩いた。驚いた俺は急ブレーキをかけて高速の路肩に急停車した。

ドコン！ ドコドコドコッ！

その反動で荷台の荷物は全て転がり、発泡スチロールの蓋が開いてしまった。中からドライアイスが大量に飛び出し、あっという間にガラスの奥は冷気で真っ白になった。

「……………な、何だよ今の…………？」

突然の出来事に気が動転した俺は、しばらく車を路肩に止めたまま茫然としていた。何かの見間違えか、いや、そうであって欲しい。ガラス越しに見えた物、あれは確かに人間の手だ。

でもそんな事は絶対にあり得ない。仮に誰かが俺の知らない間に人間が荷台に乗り込んでいたとしてもこの車は冷凍車、荷台の中はマイナス四十度を超える極限の寒さ、人がいられる場所ではない。

ドンッ！！

再び荷台の方から音が聴こえてきた。しかし、荷台の中は真っ白で何も見えない。今度は真後ろの壁を叩く感じではなく、荷台の後ろの扉を内側からこじ開けようとしている様な感じた。

「……何なんだよ、何、何、何なんだよ!？」

ドンッ！ ドンドンドンドンッ！！

その音は次第に大きくなって、ついには車自体をグラグラ揺らすぐらいの衝撃になってきた。得体の知れない恐怖にかられた俺は車から降りる事が出来ずにただ運転席で頭を押さえている事しか出来なかった。

ガンッ！ ガンッ！ ガシャン！！

さつきとは違う金属音にビクビクしながらサイドミラーを覗くと、荷台の扉が左右ともキイキイと音を立てて開いていた。扉は二重に鍵が掛かっていて、内側から開く事は出来ないはずなのに……。

「何だよ、一体何だっというんだよ!？」

運転席のドアの鍵を全てロックして、俺は怖くない様に車内のライトをつけた。すると、荷台の冷気が外に逃げ出しガラス窓からくつきりと中が見えたその瞬間、そのガラスにベッタリと血だらけの人間の顔がへばりついていた。

「ぎゃあああああ!!」

その顔と目があつて恐怖の余り錯乱した俺はサイドブレーキが掛かったままでアクセルを全力で踏んで急発進した。その反動で荷物も人の様な顔も荷台の後ろに吹っ飛び、開いていた扉から車道に転がり落ちた。

「…………ハア、ハア、ハア…………」

およそ二百メートル辺りまで走って車を止めた俺は、ミラーで荷台の中を見て何も無くなっているのを確認すると、恐る恐る運転席から外に降りて落とした荷物の場所まで歩いていった。

「…………何だよこれ、どうなってんだ…………?」

そこには、中から飛び出したドライアイスと空の発泡スチロールが転がっているだけで、人の手や顔みたいな物は何も落ちていなかった。

ダメだ、もう限界だ。こんな仕事はもう御免だ。俺は周りに通行車

や人がいないのを確認して走って車に戻った。

「冗談じゃない、もう帰ろう!」

運転席のドアを開けて座席に飛び乗りエンジンをかけて車を急発進させると、凄まじい冷気がエアコン口から吹き出してきた。

「うわぁ、寒い!」

とても人間用のエアコンの風ではない。まるで、さつき倉庫の冷凍室で感じた様な身を切り裂く様な寒さ。そして助手席から感じるおぞましい冷気と気配……。

「……サ、ム、イ……」

助手席の上には、さつきガラス越しに見えた血だらけの顔をした女性首がこちらを向いていた。その目は白目を剥いて血の涙を流し、長い髪は俺の腕や足に絡みついて引きちぎる様な強さで締め付けてきた。

「うわぁぁぁぁぁ!」

恐怖に耐えられなくなった俺は時速八十キロを超えるスピードの中で運転席のドアを開けて車から飛び乗った。地面に叩きつけられた俺はその場で意識を失い、車は高速の壁に突っ込み横転して炎上した。

その事故のお陰で俺は他の通行車に倒れているところを助けられ、内臓損傷や肩や足などを複雑骨折したものの救急車に運ばれて一命を取り留める事が出来た。

俺が運んでいたあの荷物の中身、それは頭、胴体、両腕、両足をバラバラに切断された女性の遺体だった。男女交際のもつれで出先で女性を殺害した犯人の男は、自宅に遺体を運ぶ為に親父の運送会社に冷凍荷物として持ち込んだのだ。

その時の配達伝票の控えから犯人は逮捕され、事件は解決したのだが俺は入院している間も恐怖心が消える事は無かった。なぜなら、荷台から落としたはずの殺された女性の遺体は炎上した車の中から焼死体として発見されたからだ。

バラバラになって死んでいたはずの人間がガラス越しからこちらを覗き込み、荷台の扉を押し開けたのを俺ははつきりと覚えている。もしかしたら、俺が食事の為に車のエンジンを切って荷台のエアコンを止めてしまった事と何か関係があったのか、それで殺された無念を俺に伝えようとしたのか、それは未だにわからない。

ただ、あの日から俺には後遺症が残ってしまった。それは怪我によるものではない。外科でも内科でも精神科でも説明出来ない病気。

俺は今、親父の会社の倉庫にある冷凍室に住んでいる。外の常温だと灼熱の様な熱さに耐えられずに生きていけなくなってしまったのだ。

「……サ、ム、イ……」

毎日凍てつく寒さと真っ暗な世界。そして暗闇から感じる怖ろしい何かの気配。外に出れば焼け溶け、中にいればいつかは凍りつく。俺はこの先、昔みたいな生活に戻る事が出来るのだろうか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6118d/>

---

要冷凍

2010年10月21日13時38分発行